

風の末裔シリーズ・6 t hシーズンの7

～夏紫（なつむらさき）～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「ちよ、ちよっと、待ちなさいよお！」「じゅあ!!」「

夏草むせかえる、深山の繁み。

灌木の下を、てっかいヤマアラシが走っている…と思いきや、ザンバラ頭の、紫の前髪のリリだった。

前方には、二足歩行のタヌキ風物怪モノノケ。

「このおっ!!」

娘の放った風礫(つぶて)が二度三度土煙を上げるが、タヌキはヒョイヒョイと避け、前歯を見せてケタケタと笑った。

「このっ、キャッ、いたたた!」

いつの間に、タヌキの誘導で、棘(いばら)の繁みに突っ込まれていた。長い髪がトゲに絡み取られて、酷い事になった。

「ああっ! もぉ〜!!」

タヌキはペロリと舌を出して、この隙に逃げ切ろうと前を向いた所で、遅い足にぶつかかった。

「ほおら、捕まえた。大人しくしろ」

シタバタするタヌキを両手で抱えて、コバルトブルーの青年が立ち上がる。

「ユ、ユウジーン…」

娘は棘を引きちぎりながら、ムスツとして青年を睨んだ。

「あたしの任務に手出ししないでよ!」

「ああ、悪い悪い」

と言いつつ、青年はあんまり悪いと思っていない風で、タヌキを目の前に抱き上げて覗き込んだ。

「ここはお前さんの住む場所と違うんだ。木霊達が困っているから、自分の領域へ引き揚げてくれるかい?」

「そんなんじゃダメよ! 言っちゃって、何回も来るんだから。お仕置きで身を持って分かせないと!」

娘が二本指を振り上げる前に、タヌキは青年の手をすり抜けて、繁みに飛び込んで姿を消した。

「ああっ、何で放しちゃうのよっ」

「手出しするなって言ったのはリリだろう?」

「〜〜〜!!」

「まあ、今の脅しは、かなり堪えたと思うよ。もう来ないよ」
「……………」

リリは葉っぱを絡ませたまま立ち上がって、もう一度ユウジーンを睨み付けた。

「何しに来たのよ」

「いいじゃない。俺の任務、早く終わったし、ここ、帰り道だったし」

ユウジーンは近寄って、前髪に絡まったままの茨を取ろうとした。

その手を払い除けて、リリは踵を返してズンズン歩き始めた。
 「ね、こういうチョコチョコした説得系の任務は苦手だろ？
 苦手なモノは苦手って割り切って、手伝って貰ったっていいじやない。みんなも、そうしてんだし」

繁みをバキバキかき分ける娘の後ろを、ユウジーンは大胆でゆっくり歩いて行く。

「余計なお世話だわ。あたしは長娘なの。みんなと違うの」
 「長娘だったって、初めから何でも出来る訳じゃないだろ？」

「だから、一日も早く何でも出来るようにならなきゃなの！
 でないと、この間みたい」…」

「リリ!!」
 「何よっ!」

話をぶった切られて、娘は不機嫌に振り向いた。その顔の真ん前に、コバルトブルーの真剣な瞳があった。

「な、な、何よ・・・」
 ユウジーンはリリの小さい両肩を掴んで更に顔を覗き込んだ。
 「それは、もう、気にしなくていいって、言っただろ?」

「・・・!!」

「結果的に大丈夫だったんだし、西風だってリリを必要としていたんだ。俺、何とも思っていないよ」

リリは、ビー玉みたいな瞳をワナワナと見開いて、ユウジーン

ンの両手を思いっ切り払い除けた。

「うっ、うるさーいっ!!」

払いっいでに突き飛ばして、成がはせるごとく、全力で走り去ってしまった。

後にはヒラヒラ舞う葉っぱの中に立ち尽くすユウジーン。

困ったもんだ。この間の事件…ユウジーンが山の部落で獣人に狙われて、あわやの目に遭ったのを、リリは、自分のせいだと引き摺って、ずっとピリピリしているのだ。

確かに、カノンが予知を一番に伝えたのはリリだったが、その後、ホルズにだって他の大人にだって…当のユウジーンにだって、彼は伝える機会があったのだ。

「伝えて貰えなかったのは、俺がカノンとの信頼関係を築けていなかったからだよ。リリには何の責任もない」

何回もそう言って慰めているんだけど、あの、自分中心が身体の芯まで染み付いている娘は、何でも自分のせいにして、引き隠(こも)っちゃうのだ。

執務室に入って、もう何年も経つのに、いまだに他のメンバーと馴染まない。何かという長娘、長娘、って垣根を作って、出来ないくせに、何でも一人でやろうとする。元々、魔法力だけ強過ぎるせいもあって、最近とみに孤立してしまっている。

「優しくして純粹で、いい娘なんだけれどなあ……」

「えっ？ えええーっ？」

自宅でもう一度漏らしたその言葉に、芋の皮を剥いてたレンが、悲鳴を上げた。

「や、優しくして純粹さ……」

「純粹だろ？ 小さい時からあのまんま。ちっとも変わらない」

ユウジーンは岩塩をナイフで削りながら、シレッと言った。

「ガ、ガキンチョなだけなんじゃないの？」

「ガキンチョ……、うん、そうだな。大人の朱に染まらないだよな、あいつ」

「……………」

レンはマジマジとユウジーンを見た。

「ここへ来た時から何となく気付いていたんだけど、リリが執務室で働いていられるのって、このちょっと不思議な、ユウジーンが存在なくしては、有り得ないんじゃないのか？」

芋の皮をバラバラと落こしながら立ち上がって、少年は鍋を引寄せた。

「でも、ユウジーンが悪かったね。そりゃ、リリ、怒るよ」

「ぶえっ？ 何で？」

ユウジーンは岩塩のナイフを止めた。

『何とも思っていないよ』って、ダメだろ？ お前には何も期待していないよって意味じゃん。ユウジーンがそのつもりなくても、そう受け取っちゃうんだよ。あいつ、プライド高いから」

「そ、そうか、複雑なんだな」

「逆！ 単細胞なだけ。だからガキンチョだってんだ」

「……………」

ユウジーンは削った塩をレンに渡し、ガラクタを端に寄せて、食卓を作りながら思った。

「長らく隣に居る自分には越えられないリリの垣根の内側に、この少年は軽々踏み込んでいく。彼のお陰で、彼女の謎だった部分がどんどん解明される。」

「さすが、あのエノシラ母さんに育てられただけはある……、しみじみ感謝するユウジーンだった。」

カノンが退院してからも、リリは夜になると、ユウジーン宅に訪ねて来ては入り浸って、そのまま泊まってしまっ日が続いてきた。

「僕、床で寝るの、好きになっちゃった」

とかレンが言っているし、あのリリが、少年二人という時は、まるで子供時代を取り戻すように、無邪気になるので、好きにさせていた。

しかし、彼らとは仲良く出来ても、相変わらず執務室では独りだし、あのきっちりとしたナーガ長が、リリに関しては放任主義なのも心配で、気苦労の絶えないユウジーンでもあった。

「う……」

傷口を見たおウネ婆さんの呻きを聞いて、カノンはやっぱ
り……くと、頭の中で呟いた。

「う、うむ、熱も引いたし、もう膿む心配もなからう。毎日の清潔を怠るでないぞ」

「はい、ありがとうございます。じゃあ、包帯はもついいんですか？」

「い、いや、今日の所は巻いておこう」

——額に爪が食い込んだ時の感触から、覚悟はしていた・
診療所を出ると、もう夕暮れだった。しかしカノンの足は、
ユウジーンのパオとは別の方向へ向いていた。

「どっちへ行くのよ」

振り向くと、いつもの感じで、紫の前髪が腕組みしていた。

「や、やあ、しに」

「怪我人がウロウロ寄る道してんじゃないわよ」

「……………」

「何よ？」

「今日、診療所へ寄る日だって知って迎えに来てくれたの？」

「なに自惚れてんのよ。あっちに用事があったの！」

「ふうん、そうなんだ」

『あっち』は住宅地で、リリに用事があろう苦もないんだけど、カノンは逆らわずに並んで歩いた。

「で、どうだったの？」

「うん、もう通わなくてもいいって」

「そ、良かったわね」

「……………」

夕闇で表情が見えないけれど、少年が『良かった』って顔を
していないのが、鋭い娘には分かった。

「……どこへ行くつもりだったのよ」

「うん、ハウス…。散髪して貰おうかなって。上級生の女の子
に、髪を切るのが上手な子がいるんだ」

「……………」

「ほら、イメーシチェンジ？ 気分転換に。レンみたく前髪お
ろして刈り上げて、てっぺん立てて、イマトキ風にしようかな
っつ」

「……………」

「えっと、その、レンみたいにモテたいなーっとか」

リリが立ち止まったので、カノンも止まった。

「それならあたしが切ってあげる」

「えっ?」

「櫛なら持っているわ。それと小刀。はい座って座って」

「え、いや、待って」

「あたしのセンスを見くびるんじゃないわよ。そうね、あなたの髪だとレンの真似は無理ね、コシがないったら。いっそスキンモヒカンとかどう? インパクトあるわよお」

「待って待って待って——!!」

本当に髪の根元に刃を当てられて、カノンは慌てて立ち上がった。

リリは追い掛けはせず、肩を降ろして小刀を鞘にしまった。

「…そんなに目立つの? 額の傷痕」

カノンも止まって、ゆっくりの振り向いた。

「うん、まあ」

「……………」

「あの腹の据わったおウネお婆さんが凄く顔するんだもん。スキンモヒカンよりもインパクトあるよ、きつと」

「見せてご覧なさい」

カノンは路傍の柵に腰掛けて、包帯を解いた。

「……………」

そこそこ度胸のある善のリリが、目をまん丸に見開いて、黙ってしまっただ。きれいな額の、そこだけ無機質な粘土みたいに、無残にえぐられた痕…。

「凄いでしょ」

珍しく、リリより先に、カノンが言葉を発した。

「見たの?」

「うん、明るい昼間に、水鏡で」

「……………」

「これでも長殿が、大分術を施してくれたんだよ。だから治りは早かった。でも、この傷痕は消せないって言われた」

「……………」

「前髪切って、隠すようにしようかなと。その方が…」

やにわにリリが顔をあげて、話をぶった斬った。

「切るのはダメよ! あんた、術者になるんだから、切っちゃ

ダメっ」

「え、えっと、僕、術者になんて、別に…」

「なりなさいよ!」

「なんでだよ、急にっ?」

「とにかく切っちゃダメなんだってば」

「なんで?、何がダメなの?」

リリのイライラした眉間が爆発した。

「このあたしが気に入ってんのっ、あなたの髪！ 根元が深い青で表面が薄氷みたいなグラーション。そんな髪色の子、そうでもないわ。あなたは自分で分かっちゃいけないだろうけれど、そのへんの女の子なんかにはさわらせたら、きゃあきゃあ面白がって、台無しにされちゃうに決まってる。だからぜったいにダメ！」

「えっ、えーとー。」

いっぺんに沢山捲し立てられて、カノンには混乱した。でもその沢山の中の、切れ切れの言葉を繋ぎ合わせて、彼の聡明な頭脳が、一つの結論を導き出した。

「あー、リリ、要するに、自分の好きな髪を、他所の女の子がいじるのが嫌って訳？」

「バッカじゃないの？ 何よ、その自惚れ?!」

「バカって何だよ。そもそも僕の事に、何でリリがいちいち口出しするの？」

「あ、あたしは、その傷の責任が、あたしにあるからで……」

そこまで言っただけで言葉の詰まってしまった娘の前で、カノンは首を傾げた。

「リリに責任なんてないよ？ 僕、何とも思っていないよ」

「あれ？ 何、それ？」

家に帰ってレンに指摘されるまで、カノンは、小さな胡桃の櫛が髪に刺さったままなのに、気付かなかった。

「ああ、リリの櫛……」

「一緒だったの？」

食卓に器を並べていたレンは、首を伸ばして外を見た。

「う……うん、途中まで一緒だったんだけど、帰っちゃった」

カノンはあやふやに言いながら、食卓に付いた。

「うるさい!! あんたなんか大っ嫌い!!」

って、いきなり理不尽に怒鳴られた事は、黙っていた。

「おやまあ、珍しいこった」

里の奥のヒト気のない場所に、ポツンとひとつ、灯りの漏れるパオ。古いこのパオには、第一線から退いた前の長、ノスリが一人で暮らしている。

「お前さんが訪ねて来るなんて、明日はヒョウでも降るんじゃないか？ まあ、甘茶でもどうだ？」

「いいえ、すぐ帰ります。ちょっと教えて頂きたい事があるだけです」

紫の前髪の娘は玄関先で畏まって、恰幅のいいノスリを見上げた。この身体の大きな前長様とは、ほとんど話した事がない。

「あの、シンリィ…シンリィは、ヤリコさんのことかしら？」

「あの子に何か用事かい？」

「………」

「シンリィと一緒にいる、『あいつ』に、用事かい？」

「…は？」

「うむ」

ノスリは、ちょっと居すまいを正した。

『あいつ』は感覚で動く性質だからだからな。今ヤリコにいるかは、俺にもちょっと分からない」

「そっ…ですか」

しゅんと脱力してしまった娘を見下ろして、ノスリは慌てて先を継いだ。

「だからって、疎遠にしている訳でもないぞ。ついこの間も来たんだ。ユウジーンの危険を予知して」

「来たって？ 蒼の里にっ？」

「ああ…っと、奴は出奔した身だから、里には入らない。ハイマツの丘でちよっと話して、お前さん達が解決した後だったんで、すぐに行っちゃった」

「知らなかった…」

「そんな風に里の事は常に気にかけている奴だから、そのうち会える事もあるだろう」

「………」

「なんだ、急用なのか？」

「いえ…」

「ん？」

「ハイマツの丘まで来たのなら…」

娘は漏らしてしまった言葉をグッと飲み込んで、顔を上げた。
「おじゃましてごめんなさい。帰ります」

お辞儀して立ち去ろうとする後ろ頭に、ノスリは何気ない風に声をかけた。

「ああ、そういうえば、俺も一つ、お前さんに聞きたい事があったんだ。今、いいか？」

「はい？」

リリは、ちょっと不安を感じながら振り向いた。このヒトに限らず、執務室の大人達は苦手で、仕事以外の時は、出来るだけ避けていた。

ノスリはすぐには返事をしないで、室内に戻って、小さな火鉢に鍋をかけ、甘茶の葉をバラバラ放り込んだ。

「まあ、入りなさい」

娘は戸惑いながら、室内へ踏み込む。

入って二、三步で、電気に弾かれたようにビッと背筋を伸

はし、目を見開いて、天井をキョロキョロした。

「どうだ？」

その様子を見ていたノスリが、微笑みながら聞いた。

「どうだった？ えと…何か、術が掛かっているんですか？
この家？」

「ふむふむ、流石だな。まあ、お座り」

ノスリは何だか嬉しそうに顎をさすって、毛皮を敷いた椅子を勧めた。

言われるまま腰掛けた娘は、まだ上を見回している。

「この場所は俺が住む前、エノシラとシンリィが住んでいた。

その前に住んでいたのは、今お前さんが会いたい『あいつ』だ」

「ホントなの？」

「ああ、お前さん位の年の時かな。ある朝突然、ここに住むって言い出したのさ」

「へえ……」

天井を見ながら段々上の空になって行く娘に、ノスリはそっと話し掛けた。

「どんな風を感じるの？」

「どんなって…」

「俺はずっとここに住んでいるが、具体的に感じる事が出来ん

のだ。そんな風に、すぐ分かるのが羨ましいぞ」

ノスリは甘い湯気のとつ茶碗を差し出しながら、娘を覗き込んだ。

「…そう、部屋に入ったとたん、身体がふわっと軽くなって、何だか安心な気持ちになる…。えっと、ここに帰ると、疲れていても暗い気持ちにならない、元気が湧いて来る。ノスリ様、そんな風には感じませんか？」

「おおー」

顔をほころばせた前長は、リリと同じように天井を見回した。

「やっぱり、お前さんに聞いてよかった、うんうん」

「あの？」

首をかしげる娘に、ノスリは「ニコニコして話し続けた。

「ここはな、『里の中の命の力が交叉して強く流れる場所』なんだと。身体を悪くした『あいつ』も、ここだから生きていられたって位だぞ」

「へえ!!」

リリは目を閉じて、鼻から大きく息を吸った。

「ここで暮らしていったんだ、『あのヒト』。自分の知らない、青年時代の『あのヒト』……」

娘が穏やかな顔になったのを見計らって、ノスリは口を開いて

た。

『あいつ』がお前さんに会って行かなかったのはな」

リリは巨クンと揺れた。

「深い意味はないぞ。近くまで来たからつい顔を見せるなんて、ありきたりな社交性を持っている奴じゃない。知っているんだろ？」

「……………」

「その変わり、必要な時は必ず駆け付ける。今回だって、随分遠くからすっ飛んで来たんだぞ」

「それは、ユウジーンの危機だったから……」

リリの声は、「コヨコヨ」と口の中に埋もれてしまった。

場を繕うように、ノスリは話を変えた。

「そうそう、シンリイの奴。あいつ、お前さんと同じだったぞ」

「同じ……」

「子供の姿のまんまだった。見た目の成長が滞るのは、家系かもしれないな。シンリイの母親のユーフィも、随分長い間チビッコだったが、大人になった途端、百人が百人振り返る別嬪へっぴんになった。リリもきょつてっつなぬ。楽しみだな」

ノスリが自分の気分を良くしてくれようと話しているのが分かっていたので、リリは大人しく椅子に座っていた。でも、頭

の真ん中は、あんなに心通わせたシンリイまでもが、会って行ってくれなかった寂しさで、一杯だった。

羽根の少年は、広い世界を旅して、きつというんな物を見たり聞いたりしているんだ。あたしの事なんて、もう昔の思い出に埋もれた、沢山の中のひとつなんだろうな。

ふ……と、目の端に光が揺れた。

出窓にぶら下がった何かが、月光を反射してキラリと光ったのだ。リリには一目で分かった。これは、『あのヒト』の物だ。ノスリを見ると、背を向けて、部屋の反対側の棚の菓子箱を「こそそやっている。」

……

考えるよりも先に、手が動いていた。

放牧地の手前に大きな杏子の木があり、甘酸っぱい香りの漂う真下が、ユウジーンと二人の男の子の暮らすパオだ。

窓から湯気があがり、賑やかな声が漏れる。

「カノンのトコ、多いー」

「レン、ヒトのお皿を覗かないの。カノンは傷を治すのに、エネルギーがいるんだよ」

「ぶ〜」

「あの、おウネお婆さんが、もう傷は塞がったって。だからコウジーン、僕もみんなと一緒にして」

「おお、そうか、よかったな。包帯はもう取れるのか？」

「えと…、まだ触ると痛いから、もうちょっと入り口に足音がした。」

「リリかな？」

レンが口の物を押し込みながら、玄関を開いた。

「あ…」

意外なヒトが、困り顔でそこに立っていた。

とっぷり陽の暮れたハイマツの丘。

玉砂利の上に一人立つ、獅子頭のリリ。

小さな両手に何かを握り締め、一心に術を唱えている。声も身体も小刻みに震え、唇は血の気が引いて真っ白だ。

ついさっき、やってしまった事…。

ノスリ様は、多分、すぐに気付くだろう。物凄くガツカリするだろう。でも仕方がない、引き換えせない。もう、やってしまったんだ。

長らくの時間が過ぎたが、手の中のモノはコトリとも反応しない。リリはこわばった指をほどいて、肩を落とした。当たり前、自分は、手紙を読む以外の難しい術は、使えた事がない。

「もっと、教われればよかった・・・」

『あのヒト』と大長とシンリィと旅をしたのは、四つの時の、ホンの数カ月。その時は、何も知らずに過ごしていた。

蒼の里へ来て初めて、『あのヒト』が伝説の術者だったと聞いた。教わる機会は何らでもあったのに、憎まれ口ばかり叩いていた。そんな自分が、今、いくら念じて、『あのヒト』に届く訳がない。

小さなため息が暗い草原に吸い込まれていった。自分はいつだって、肝心の事に気付かなくて、後で後悔ばかり。昔も、この間も…。

「リリ？」

不意な声に、顔を上げた。

勿論、自分の求めていたヒトではない。

玉砂利の上に降り立ったのは、大きな草の馬に二人乗りの、

西風の少年達。

「な、なにやってんのよ、あんた達、また…」

情けない顔を見せぬよう、慌てて背中を向けるリリに、下馬した二人は近寄った。

「大丈夫、今度はちゃんと断って借りて来たから」

レンは右、カノンは左側から、そっと彼女を伺った。



「ねえ、ノスリさんが訪ねて来たんだ」

「…!!」

「リリにあげたお菓子の袋の中に、間違っただけの物を入れちゃったんだって。えっと、大切な物だから、返して欲しいって」

浮草の上を歩くように喋る少年達に、リリは目をそらしたまま、ブスッと呟いた。

「お菓子の袋に大切な物を入れちゃったって？ ノスリ様がそんなドジな事をするよ、本気で思っているの？」

仏頂面の娘に、少年二人は困った顔を見合わせた。

少しの沈黙の時間が流れる。

「なあ、ここって、リリの秘密基地？」

レンがシラッと口を開いた。

「え？ ううん、なんでよ？」

いきなり聞かれたので、つい普通に答えてしまった。

「見晴らしがいいのに、ハイマツに囲まれて下から見えないし、秘密基地にもってこいだなって思っただけ」

「はあ」

「よし、ここ、僕らの秘密基地にしちゃおう。旗立てて、見張りの合図って」

「訳わかんない。旗なんか立てたら、秘密じゃなくなっちゃう

じゃない。バッカじゃないの」

「バカって言うなよ」

「バカだからバカって言ったのよ、ガキンチョ」

喋らされているうちに、娘の口からこぼれが消えた。

「お、お菓子！」

今度はカノンが、いきなり叫んだ。

「ひ、秘密基地では、持っているお菓子は、分配するんだよ。あ、あるんでしょ、貰ったお菓子。分けてよ、晚ごはん途中で、僕、お腹、ペコペコ」

目を白黒させながら一生懸命喋る少年に、リリは苦笑いして、さっきノスリに貰った菓子袋を、ポケットから引っ張り出した。

三人、玉砂利の上に、並んで座る。

リリを真ん中に、右にレン、左にカノン。ただ黙って、風に揺れる草原が星明かりにチラチラ反射するのを、見つめる。

割って分けた麦菓子は甘苦く、凍てついた頬の内側も溶かされて行くようだった。

「ごめんね、付き合わせて」

リリがポツと言った。

「は？ リリに振り回されるのなんて、僕らにや通常運行だし」

「なによ、それ」

レンの言い草に、反対側のカノンもククッと笑った。そして、菓子の入っていた麻袋の口を開いて、リリに向けた。

「秘密基地では、宝物も供出するんだ…」

娘は口をキュッと結んで、手の中に握り締めていた『それ』を、袋の中に滑り込ませた。

カノンは横目でそっと、それを見る。

白濁した緑の平たい石……。リリは何でこんなモノが欲しかったのだろう。あんなに優しいノスリさんを困らせて。

でも、そこは聞かないで、そっとして置いた方がいいんだろうな。ノスリさんは、ただこれが返ってくればいいだけみたいだったし、僕らに頼んだのは、大事(おおじこ)にせず、穩便に済ませたかったからなんだろう。

「へえー、そんなちっちゃい石が欲しかったの？」

いつの間にか覗き込んでいたレンが叫んで、カノンは仰天した。リリも弾かれたように顔を上げる。

「リリが欲しがるなんて、どんな秘宝かと思ったら。どこにももありそうな石じゃん。ああでも、さっき呪文みたいなのを唱えていたよね？ もしかして、すごい魔法が使えたりすんの？」

あたふたするカノンを尻目に、レンはすけすけ踏み込んだ。

「そ、そんなじゃないわよ、ただ…」

リリは、さっきみたいに、つい喋らされてしまっている。

「ただ、その石の前の持ち主に、会いたかっただけ…」

「へえ?! その石で通信できるの？」

「うん…」

俯うつむいた娘は、首を横に振った。

『モノから持ち主に呼び掛ける術』なんて、難しすぎて、やっぱりダメだった

「そっ」

軽く言っているけれど、レンが真顔なのに、カノンは気付いた。

「理由を言って頼めば、ノスリさんはその石、貸してくれたんじゃないの？」

「……………」

「頼むのが嫌だったの？」

「あ、あなたには関係ないわよ！」

「あるよ」

リリは激しい目を上げたが、レンは目をそらさず、紫の前髪の下で凍て付いた顔を、しっかりと見据えていた。

「僕、リリが盗人なんてイヤだ。ぜったいにイヤ！ きっと、そんな事するのは、ちゃんとした理由がある筈なんだ」

「なによ、その決め付け」

「ノスリさんも、多分、そう思っているんだ」

「……」

カノンは、ここであつと、ノスリが自分達に頼んだ本当の理由に気付いた。

紫の前髪がうつむいて、何度も喉を鳴らした。

二人は黙って待った。

「ごめん、言うけれど…上手く伝えられないかも…」

「いいよ、言ってみて」

「あのね、…借りたいて頼んだら…理由を聞かれるじゃない。

『あのヒト』に会いたいからって答えなきゃならない。それが嫌だったの」

「へ？、なんで？　そういう理由でもいいじゃん、ダメなの？」

「それじゃ、『ノスリ様のお許しを貰って、会わせて貰う』形になってしまふ。あたしは、お許しなんか貰わずに、独りで、自由に、『あのヒト』に会いたいの」

「・・・リリ、それ、無茶だよ」

「分かってるわよー」

リリが吐き捨てるように叫び、ヒヤヒヤ聞いていたカノンは、座った形のまま飛び上がった。

「あたしは無茶ばかり言うワガママ者だよ！　だから、呆れて、嫌って、罰して、それで済ませてくれればいいのに！」

「そうは行かないよ、僕らもノスリさんも、リリが好きなんだモン」

「だ、だからって、あたしの領分にズカズカ踏み込んで、理解した気分になられたくないのよ！　『あのヒト』とあたしの思いは、あたしだけのモノだわ。たとえ『あのヒト』の親友のノスリ様にだって、間に入られたくない！」

一気に捲し立てた娘は、唇を震わせ、髪の前まで電気が通ったみたいにビリビリしている。

カノンはもう、チキチキと音を立てる、真っ赤な釜戸の前に座らされている気分だった。しかもそこに、湿った生栗を次々と放り込むレン。

「そう」

対極に水を打ったように、レンは静かだった。

「よかった、リリ。それをノスリさんに言えばいいよ。ノスリさん、きつと安心する」

「は？　え？　こんなので、アンシンっ？」

娘の怒っていた顔が果けた。

「うん、ホッとするよ」

「ええっ?!!」

「さて！ それでは！」

口を半開きにしたままのリリを尻目に、レンは、膝を叩いて立ち上がった。

そして、さっきから隣で、青くなったり赤くなったりしているカノンの手から袋を取り上げ、中の石を掌に転がり出した。

「カノン、頼む！」

「うへっ、そうなるの？」

「そつなるだろ」

「あんまり期待しないでよ」

青銀の髪少年は、それを受け取って、神秘的な面持ちで立ち上がった。

「えっ？ なに？ 何なの？」

何が何だか分からないリリの前髪に、レンがポケットから出した何かをくっ付けた。瞬間、カノンの髪に刺しっ放した、胡桃の櫛。

「っ？」

「ねえ、リリ、なんで僕らが、初めてのこの場所に、リリを指して一直線に来られたと思っつものっ？」

「あ…」

「カノンが、この櫛に残った『持ち主の気配』から、探し出したんだ。すげえんだぜ、最近のカノン。蒼の里に来てから、牙え芽えなんだ」

「…!!」

「それ、大袈裟」

丘の一番高い所に登ったカノンが、振り向いた。

「呼びかける術じゃなくて、探すだけだし。遠すぎると無理だし、古い物でもダメかも。半分はガツカリする気持ちでいて」

そう言つと、石を掴まんで包帯の額に付けた。

リリには、その瞬間、石が光を増したのが見えた。術は本物だ、効いている。

カノンの集中を削がぬよう、レンが小さな声で言った。

『そのヒト』の居場所、分かるといいな。もし近かったら、今すぐ、会いに行っちゃえばいいさ」

「……………」

「ノスリさんには、僕からうまく言っておくから」

「あの、レン…」

「うん？」

「あ、ありがと…」

「うへっ！ 明日は太陽が西から上るぞ」

カノンが丘の上でじっと集中しだして、小半時がすぎた。

夏とはいえ、湿気を帯びた草原の夜は、待っている二人の手足を凍えさせる。あまり遅くなると、大人達が心配して、捜しに来てしまうかもしれない。

「ね、ありがとカノン、もういいわ。その気持ちだけで十分……」
自分が諦めないと、少年達も家に帰れない。そう思ったリリは、丘の上に向かって、歩きかけた。

——と——？

踏み出した一歩が、空をきった。そこにある筈の、玉砂利の地面がない？

「きゃっ?!」
バランスを崩す娘の身体を、後ろにいたレンが、慌てて支えようとした。しかし、駆け寄った彼の足の下の地面も消えた。

「うあっ!」
——落ちる?! ——

いや、落ちない? 二人の身体は、空振った一歩の分、その場で大きく縦回転した。レンが目一杯腕を伸ばして、リリの衣服を掴んだ。

さっきまで立っていた後ろの地面もない。二人はお互いを引

き寄せて支えにし、空中でバランスをとった。

「リリ、大丈夫か?」

「ええ、何なのよ、これ?」

いつの間に、うっすら見えていた草原の景色も、姿を消している。

「カノン、おーい、カノン!」

闇の中に青銀の髪が、さっきと変わらない位置に見えた。

「何なんだよ、これ? お前の仕業か?」

「知らないよ。レン、そっちはどんな風になってる?」

「足元がなくなっって浮いてる」

「そう、こっちと同じだ……あっ!」

カノンが振り向いた後ろの空間が揺らいだ。

真っ暗な中、ぬらぬら光る巨大な『壁』が現れ、少しずつ横滑りしているのだ。

シュリッ・・シュリッ・・

重量感のある湿った音が響く。壁は一か所ではなく、三人を囲むように現れ、繋がった。

それがウロコのある巨大な胴体だと気付いた時、上空に縦の瞳孔を持った黄色い眼がカッと開いた。目と目の間からして、とんでもなくでかい。

「リ、リリの会いたいヒトって、爬虫類系っ?！」

「違っわよっ、そんな知り合い願ひ下げだわ! カノン、あんな、何やったのよ?!」

「僕にだって分かんないよ!」

妖しく光る瞳孔が狭まったと同時に、生臭い息を吐き散らかしながら、三人に向かって降って来た。

「!!」

リリが両足を振り上げて、レンを押し出すように蹴った。

「うわあっ」

飛ばされたレンはカノンにぶつかり、そのまま少年二人絡まって、遠ざかる。

「カノン、レンを連れて、何とか逃げて!」

娘は、手の中に風のエネルギーを溜めながら叫んだ。

こんな大きな相手に、風つぶてが効くだろうか? でも、せめて、あの子達は逃がさなければ・・・

——ヒュン——

甲高い風切りの音。

リリとへびの間の闇を、何かが横切った。

一瞬だったので、少年達には、緋(あか)い色しか見えなかつ

たのだが、へびは何故かそれに反応して、向きを変えてそちらを追った。

次の瞬間、キンと澄んだ音、眩い光。

暗闇に慣れていた三人は、目を覆った。

一拍置いて、へびの行った方向から、ぶわっと風圧が来た。

地面のない空間で、少年二人は、クルクル回りながら、必死に態勢を保った

「何なんだよ、もう! カノン、使ったのは、『持ち主の居場所を捜す術』だったんだろ?」

「うん、でも、手応えを感じた瞬間、ガクンと足元の地面が消えちゃったんだ。ごめん、きつと、何かしくじったんだ」

「ううん、カノン、あんな、すごいわ!」

眩つぶやくリリの見ている方向を、少年二人も慌てて見た。

さっき眩い光が上がった空間に、巨大なへびが半透明で浮かんでいる。へびは、光の粉を撒き散らしながら消滅している最中で、その中心に、翡翠色にボワッと光るヒト型が立っている。

へびがすっかり消えきると、そのヒト型が、ゆっくりにこちらに歩きたした。

「ボクの境界に入り込めるなんて、一体どこのどいつだ?」

暗闇を貫く、風みたいな声。



レンとカノン息を呑んだ。

このあやふやな空間で、薄青く光るその男性は、風が吹けば折れんばかりに細っこいのに、物凄く存在感があるのだ。髪が長くザンバラなのは、何だかリリと似ている。

地面は無い筈なのに足取りはしっかりしていて、しかも一歩ごとに近づく距離が、歩幅を無視している。

「カーたん!!」

リリが弾かれたように叫んだ。

「カ、カータン??」

少年二人が目を真ん丸にする横を、紫の前髪の娘は、手足をジタバタさせて、そのヒトに泳ぎ寄った。

「カーたん、カーたん、カーたん!」

「なんだ、リリか。何をやっているんだ? こんな所で」

腕にしがみついて来る女の子の興奮っぷりには無頓着に、そのヒトの声は、抑揚のない棒読みだった。リリの会いたかったのはこのヒトなんだろうが、彼女の焦がれ振りとは裏腹に、なんだか、昨日別れたばかりみたいない様子だ。

「とうとうか、どうやってここに入り込んだ?」

「い、ここ??、ここって、どこなの? カーたん?」

「さっきも言ったろ、ボクの作った結界の中」

「あのへびも?」

「あれは魔性だ。退治しようと結界を作って閉じ込めた所で、キミ達が、奴のとくろのド真ん中に現れた」

「ええっ?」

「泡喰ったのはこっちだ。咄嗟にシンリイが飛び出して、奴を引き付けてくれたから、事なきを得たもの」

紫の前髪が、目を輝かせた。

「シンリイ? さっきのはやっぱり、シンリイだったのね?」

「ああ、ダッシュしすぎて、結界を突き破って飛び出て行った。まったな。我が息子ながら、なかなかの逃げ足だ」

「シンリイ...」

「ねえ、おじさんがあのへびやつつたの? 凄いいじゃん」

少年二人も、えっちらおっちら、近寄ってきた。

「.....」

男性は、眉間に縦線を入れて、思いつきり嫌そうな顔をした。少年達はしゃっくりしたみたいに黙らされ、リリが慌ててその場を継いだ。

「カーたん、今のカーたんは、魔性退治の旅をしているの?」

「ああ...、そんなに大層なものではない。ボク等がやっているのは、風出流山かぜいするやまの、残党狩りだ」

「風出流山、あの時の…」

「あの時、異次元から召喚されて、こっちに残りちゃった奴だ。元々こちらのモノではないから、お帰りの願わねばならない」

「だ、だったら…」

「手伝いたくないなんて言い出すなよ。リリは執務室の一員だろ。」

蒼の里には、蒼の里の役割がある。知っている筈だ」

言おうとした事に先回りして釘を刺されて、リリは、鼻の頭を赤くした。

「まあ、これはボク等に適任なんだ。連中、羽根に執着があるから、シンリィを見ると、目の色変えて追いかけて来る。気配のある所に立たせておくだけで、向こうから寄って来てくれる」

「ぶへっ、自分の息子を囮にして魔性狩りしてるって事？」

「それって、親としてどうかと思う…」

離れた所でこそぞ眩く少年達を、男性はギロリと睨み付けた。

「リリ、この身も蓋もない事をかえするのは、何処のピヨコだ？」

「あっ」

リリは、思い出したように、少年達の所に急いだ。そして、

二人の肘に手を掛けて、小さな声でささやいた。

「ね、これから先の事、誰にも言わないでくれる？」

「い、いいけど…、聞かれたくないのなら、僕達、遠くに離れているよ？」

「いいのよ、どっちみち、かーたんに会えたら、呼ぶつもりだったのよ…」

「…？」

リリは口を結んで、そして、カノンの手を引いた。

男性は、ぼおっと輝く光の中で、少年をじっと見ている。

娘はカノンを彼の前に押し出し、額の包帯をスルスル解いた。

「リ、リリっ」

「いいから、じっとしてー！」

青銀の髪の少年の顔を間近に見て、男性は目を見開き、両の口の端を上げた。

「…奴に似て、理屈っぽいんだらうなあ？」

「あたしは、奴はよく知らないけれど、確かに、かなぐり理屈っぽい。はい、これ！ こっ、見て頂戴！」

包帯の下から現れた傷痕を見て、男性は更に、目を見開いた。

「消せないかしら？ かーたん、よくあたしの擦りむいたの、

きれいに治してくれたじゃない」

「アしとこしとを一緒にするな」

そう言いながらも傷痕を覗き込み、鶏ガラみたいな手を上げ

て、額に触れた。触られた所がチリチリして、カノンは感電したみたいに緊張した。

「……ここへ飛び込んだのは、キミの仕業か？」

「あ、はい、そんなつもり、なかったんですけど」

少年は、手の中の小さい石を見せた。

「ぶっっん……」

男性はまた悠長に、傷痕を指でなぞって、考え込んだ。

あのリリが、じっと黙って彼の言葉を待っている。

誰なんだろう？ 少し落ち着いて来たカノンは、目を上げてそのヒトを見た。

薄水色のザンバラ髪の方こうに、そこだけ鋭い三白眼の目。

その下に大きな隈があり、頬が瘦け、唇は薄く、若いのか年寄りなのかも分からない。骨の継ぎ目まで分かる程に瘦やせかけているのに、全身がビシリと鋭い気に覆われている。

「ナーガは、何て言っているんだ？」

男性がポツリと聞いた。

「長殿は、この傷痕は消せないって仰いました」

カノンが先に答えてしまい、リリはへあーっって顔をした。

「そっか……」

長い髪を揺らして、男性はリリに向き直った。

「蒼の長の決め事は絶対だ。ナーガ・ラクシャがそう言ったのなら、ボクには手出しする事は出来ない。そのくらい分かっているだろう、リリ？」

少年達は、彼女が、誰にも言わずに、この男性にコンタクトを取りたがった訳を、今、理解した。

「で、でも……！」

娘は、一回唾を呑み込んでから、キッと顔を上げた。

「傷を治すのは、悪い事ではないじゃない。父さまより、かーたんの方が術の力は上なんでしょう？ 治せるのなら、治してあげたいのよ」

男性は居住まいを正して、険しい声になった。

「自分の父親の……蒼の長の力を、見くびるんじゃない、リリ。術の力に上下があるとしたら、間違いない、ナーガの方がボクよりも上だ」

「……………」

男性は、再びカノンに向いた。

「その傷痕、消そうと思えば、ある程度は消せる。ボクに出来るんだから、ナーガに出来ないって事はない。それを消さないのは、何か意味があるという事だ」

「……どんな、意味……なんでしようっ？」

「それを『知る』事も、意味の一つだ。何でもヒトに頼るな」

「……………」

カノンまで黙らされ、男性は、髪をひるがえして背を向けた。

「そろそろ結界が切れる。役に立てなくて悪かったな」

「待って—」

長い髪の背中に、リリがしがみ付いた。

「お願い、かーたん—」

「リリ、それ以上駄々を捏ねると、ボクも考えなきゃならなくなる」

「ええ、どんな罰でも受ける。あたしの事、嫌いになってもいいから、とにかく、何でもどつでも、この子の傷を治して！ お

願い、お願い…します」

少年二人は、唾を呑みこんだ。こんなリリ…こんな、プライドもへったくれもないリリ、見たことがない。

「リリ、僕、もういいから…」

と言うカノンの声をかき消して、娘は眼光を湛えて叫んだ。

「あたしのせいなの。あたしが迂闊なせいで、ルウシエルの大切なこの子を傷付けてしまった。ルウシエルの大切な大切な額を、ソラとそっくり同じな額を」

カノンは目を見開いて黙った。振り向いた男性は、さっきまでの険しい顔と違い、眉を下げた困惑顔だった。

「髪もソラとそっくり同じ。ルウシエルがどれ程この子に支え

られて来たか、この子を一目見て分かったわ。なのにこの子ったら、傷を隠す為に髪を切るなんて言うの。ねえ、何を引き替えてにしてもいいから、この子を元のきれいな額に戻して」

「リリ、ボクを困らせるな…」

男性が、心底困り果てた顔で、娘の腕に手を掛けた時・・・

「かっけえ——!!」

いきなり頓狂な声が響いた。

それまで一言も弁しないで一歩下がっていたレンが、カノンを後ろから覗き込んでいる。

『『砂漠の灰色狐』みたい!!』

『砂漠の灰色狐』とは、西風の伝説に出てくる英雄だ。まあ、どこの土地でも『額に向こう傷のある子供向けヒーロー』のお

伽嘶は、ありがちだ。

「そう?!」

カノンが目を細めて、子供らしい笑い顔になった。

その笑顔は、重い傷痕を凌駕した。

「リリ、僕、本当にいいんだ。レンはカッコイイって言うてるし、ルウシエルも、きっと、そう言う」

「そういう問題じゃ……」

「リリは、僕に傷があったら、嫌いになるっ」

「ばっ、バカ言わないでよー」

「じゃあ、ルウも一緒だ、何も失わない。僕は僕だから」

「……………」

「それに、早くも既に、一個、『知る』事が出来た」

「っ」

「リリが、ヒトの為だと、どれだけ、なりふり構わず振るまえる、優しい子かって」

「なっ……」

娘は頭の先まで茹で上がった。

「お節介オソナなただだよ、こいつは」

「う、うるさいわねー」

子供達のやり取りを静かに眺めていた男性は、改めて踵を返した。

「ボクはもう行くぞ。今度から、滅多な事でボクにコンタクトを取るな。その度に、いちいち飛んで来られたんじゃ堪らん。

こちらら、安全な場所に居ない事の方が多インだからな」

姿がふうっと薄くなった

「あっ！ か、かーたん……」

リリが叫んで、言葉を泳がせた。今どこにいるの？ また会えるの？ 言いたい言葉は一杯ある。でも……………

「おじさん！」

またしてもレンの頓狂な声に、男性は眉間に縦線を入れて振り向いた。

「リリったら、その石、ノスリさんに黙って持って来ちゃったんだ。叱ってやって」

カノンは飛び上がった。何で、今、それを？

男性は、大して表情を変えずに、リリを見た。彼女は、真っ青になって、俯うつむいている。

「ノスリは……」

声の調子が、今までと違う。無色透明だったモノに、色が付いたように。

「ガタイはでかいが、キミが思っているより、ずっと、寂しがりで、心許なく、脆(もろ)い」

娘は顔を上げた。

「ボクは、もう、側に居てやる事が出来ない。だから、リリ、キミが居てやってくれ。あいつの事を、頼む」

リリは声を発しなかったが、横にいるカノンには、彼女の身体にみるみる精気がみなぎるのが、分かった。

と、その時、彼の向こうの遠い闇に、緋色がちらりと横切った。

「シンリィー！」

リリの胸がドクンと波打った。そして分かった。シンリィが自分に逢って行ってくれなかった訳。

あたし、ずっと遠くばかりを見て、近くが見えていなかった。足元の地面に足を付けていなかった。それじゃいけないかったんだ。あたしにはあたしの、居るべき場所がある。それを見据えて、ちゃんと立っていないきゃ、駄目だったんだ。

リリは背筋を伸ばして、男性の後ろ姿に向いた。

「あたしの願い、聞かないでくれて、ありがとう。カーたん」
カノンも慌ててリリの横に立った。

「カータンさん、ありがとうございました」
シンもついでに反対側に立った。

「おじさん、またね」

男性は最後、苦虫を噛み潰したような顔をしたが、すぐに消えた。

気が付くと、夏の虫の音がチキチキ響く、ハイマツの丘に立っていた。



三人が馬繋ぎ場へ降り立つと、コバルトブルーをカンテラのオレンジに照らしたユウジーンが、口を結んで立っていた。

「ノスリ様は？」

聞きかけるリリの頬に、ユウジーンの掌がパシと音を立てた。

「ユウジーン！ リリは」

庇おうとするカノンを、リリが慌てて引く張った。この愚直な少年が、自分が隠しておきたい事を黙っていられるとは思えない。

もつれる二人に被って、レンが一際大きい声で叫んだ。

「ユウジーン！ みんな僕が悪い！」

「わんわん」

「レン、なんだ？ 何でそうなるんだ？」

他の二人が何か言い出す前に、レンは更に大きな声で言った。

「僕が悪い！ 調子に乗ってバカな事を言っちゃったから、リリにあんな真似させちゃった。言い出しっぺは、僕なんだ」

「は？ レンが？ リリの盗みと、何の関係があるんだ？」

「うん、話せば長くなるけれど……」

「手短にしろ。長様が執務室でお待ちなんだ」

うわあ、長殿にバシちゃってるのか……と、ヒビるカノンを後目に、レンは落ち着き払って、もっともらしく腕組をみした。

「あのさあ、カノンが此処んとこ、術の力の上がり方がハンパなかったんだ。絶対凄い能力が目覚めつつある、って僕が言うのに、リリはハイハイって取り合ってくれなかったの」

「……………」

そんな話はした事もないのだが、リリは取りあえず黙っていた。

「んで、腹が立って、大口、叩いちゃったんだ。蒼の里でも長殿を避けたら、カノンより上の術者なんていないから、悔しいんだろって。そしたら、リリが滅っ茶キして、スッコイヒト召喚して、カノンなんかケチヨンケチヨンにしてやる——！
っつ」

「……………」

「それで、こうなっちゃったの」

「はあ……」

「あの石、一晩くらい借りてもタイショブだと思ったのに、即バシだったね、リリ」

うわあ、苦しい筋書き……と、冷や汗タラタラの二人の横で、ユウジーンは半ばあきれ気味ながら、この与太話を信じている風だ。そうだ、このヒト、剣術以外はちよっとズして寛容だったんだ……

「で、そのスゴイヒトを召喚する為に、石を持ち出したのか？」
少年が袋から出して見せてくれた石に、ユウジーンは見覚えがあった。大昔、執務室の大机の上で、クモの巣状に割れていた石板の欠片かけら。

「ス、スゴイヒトって、まさか…」

「うん、『カータン』さん」

ユウジーンは、冷や水を浴びた顔で、少年達とリリを交互に見た。確かにリリは小さい頃、『あのヒト』をそう呼んで、神をも恐れぬ態度をとっていた。

「き、来たのか？ 来てくれたのか？ そんな、くだらない理由で…」

「来た、っていうか、カノンの術で、間違って、こっちがあのヒトの所に飛んじやっただけだよ」

「……………」

飄々と語るレンに、ユウジーンは絶句している。

「まあ、結果は、相手にもして貰えなかったけどな、カノン」

「う、うん…」

「そりゃ…そうだろう…」

ユウジーンは、怖いもの知らずの子供達を無事に帰してくれた『あのヒト』に、内心頭を下げながら、大きくため息した。

「でもさ、物からその持ち主の居場所まで飛べるなんて、凄いやと思うない？」

レンがまた余計な事を言い出した。

「あ、ああ、そうだな」

「その点は、カータンさんも認めてくれたみたい。それだけで僕は満足なんだ。本当は、西風のカノンの額に開いた『第三の目』を、そのスゴイヒトに見て貰いたかったんだ」

「だ…だい…？」

「さんの…？」

「めえ…？」

顎が外れそうな三人の前で、レンは更に力強く繰り返した。

「そう！ 第三の目！」

第三の目って、神話の神サマが額に持っていたりする、森羅万象を見渡す目だ。『砂漠の銀色狐』も、持っている。…っていうか、レンのソースは、其処だろう。

「し…レン…」

カノンは真っ赤になったが、ユウジーンは妙に納得した。

「そ、そうか」

このヒトのズレまくった寛容さ加減に、三人は心から感謝した。

「でも、ノスリさんに謝らなきゃ。あと、長殿にも」

「あ、ああ、分かった。ちょっと遅れて歩いて来なさい。先に、かいつまんで、ナーガ様に話しておくから」

「ウウシーンは脱力気味ながらも、先に立って執務室に走った。

遅れて固まってこそこそ歩く三人。

「あんだ…、凄い方向に頭が働くのね」

「レン、僕、そんな、第三の目なんて…」

「そう？ でもこれでウウシーン、カノンの傷痕を見てもウウシウシに病まなくて済むんじゃない？ 二人とも、それが物凄く心配だったんだろ？」

飄々と歩くレンを、カノンとリリは思わず立ち止まって、マジマジと見つめた。

「それに、境界を破ったのは本当じゃん。マジで第三の目だったりして！」

二人より三步前を後ろ向きに歩くレンは、背中を何かにぶつけた。

「父さまー！」

「長殿ー！」

「ひえっー！」

群青色の長い髪の毛、背の高い蒼の長。いつ見ても、めっちゃくちゃ存在感がある。その長殿が、額飾りを揺らして、カノンの

顔を覗き込んだ。

「見せてごらん」

「あっ、あのあの…！」

レンがあわあわする横で、長殿が包帯を解いて、カノンの傷痕をじっと見た。長い指が二、三度傷痕を撫でる。

「ひむ…」

長は目を離して、カノンの両肩に手を置いた。

「後は貴方次第ですね。しっかり精進しなさい」

そう言って、顎が外れそうなレンと、茫然とするリリに向き直った。

「レン、鋭い洞察力です。大切になさい」

「ひ、ひゃい！」

「リリ、お茶目も大概にね。病み上がりのカノンに負担をかけるのはよくない」

「…はっ」

「ノスリ殿は自宅です。一緒に謝りに行きましょう」

「一人で行く…」

「子供と一緒に謝るのは、親の役割です」

少年達も行くと言つのを、長は優しく遮った。リリは小さく手を振って、父親と共に坂を登って行った。



レンとカノンは、ユウジーンと連れ立って家へ戻り、ちょっとだけ説教されて、床に着いた。

疲れたユウジーンが寝入ってから、毛布を被って二人はココソ話した。

「出任せがバレルんじゃないかとヒヤヒヤしたけれど…、長殿があんなコト言うなんて？ まさかホントのホントに第三の目？」

「それはないと思うよ、レン」

「だって、カータンってヒトの言うことには、長殿がカノンの傷痕を残したのには理由があるって。それってやっぱり…」

「だから、それはないって。術の力が上がって来たのは、怪我をする前からだったし。今日の術だって、結果オーライだけれど、いわば失敗じゃん」

「そ、そうなの？ (あれはあれで凄いやと思うけれど)」

「それに、カータンさんの言った事…長殿がこの傷痕を残した意味…、もう、分かった気がする」

「マジ?!」

「今日だけで、いっぱい、『知る』事が、出来た」

「何だよ、何を？」

顔を近付けるレンに微笑んで、カノンは毛布をはぐって、仰向けに寝転んだ。

開け放した窓から蒼い月が見える。

いつも隣にいたレンが、どれだけ広く細やかな心の持ち主だったか。リリが、どれだけ全力で愛情を注いでくれる娘だったか。長殿、ノスリさん、カータンさんの、子供達への、その場凌ぎではない、本当の愛。

きっとこれからも、沢山の事を『知る』コトが出来る。そういう意味では、この傷痕は、やっぱり第三の目って言えるのかもしれない。

里の奥のノスリ宅。

リリは、少年達と約束した通り、正直に謝った。

「あたし、ノスリ様に嫉妬しました。あたしだってかーたんに会いたかったのに、ノスリ様だけ当たり前みたいに会って……。でも、羨ましがってるって思われるのが悔しくて、素直に貸してって言えなかったのです。ごめんなさい……」

ノスリは目を細めて何度も頷き、娘の小さな頭をポンポン撫でた。西風の少年二人の力に、心から感謝しながら。

「その石は、お前さんが持っていなさい」

「でも……」

「石というのは、持ち主を選ぶ。今度は、お前さんと居たいぞうだ」

礼を言っ、父娘は、蒼い月の家路を辿る。

頬を何度も触る娘に、父は静かに声を掛けた。

「どうしました?」

「ん、シーンにぶたれた……」

「そうですか」

「ぶたれて嬉しいなんて、バカみたいだね」

「それは、良かったね……」

く おしまい く